

「文章表現法」講義の必要性と敬語に関する家庭の教育力

本多 泰洋

Necessity of Phraseology Lecture and Educational Ability of Students' Home to Command of Honorific Language

Honda Yasuhiro

Synopsis

The students of Teikyo Junior College have a lecture on phraseology including vocabulary, sentence expression, command of honorific language and how to write a letter and CV. 52 woman students had a questionnaire about command of honorific language. 52% students believe that they can use honorific language correctly and 40% students believe that they can't use honorific language correctly. 40% of the students who can use honorific language correctly learn them at school, 40% of the students learn them from parents, and 25% of the students learn them through part-time job. The other hand, 70% of the students who can't use honorific language correctly learn them at school, 10% of the students learn them from parents, and 25% of the students learn them through part-time job. 96% of the students answer that they use honorific language occasionally.

要旨

本学では文章表現法の講義で敬語の使い方の指導をしている。今後の参考のため、学生の敬語に関する意識調査を行った。結果は、学生の52%は人並みに敬語を正しく使えると考え、約40%が使えないと考えている。敬語を正しく使えると考える学生が、敬語を学習したのは、それぞれ約40%が学校でと親からと回答、約25%がアルバイト先でと回答している。一方、敬語を正しく使えないと考えている学生が、敬語を学習したのは、約70%が学校で、約25%がアルバイト先で、親からは10%以下であった。敬語を正しく使えないと思う学生の家庭の教育力は低く、敬語を親から学習した経験が顕著に少ない。普段の生活で敬語を使っているか尋ねると、何らかの機会にとの回答が96%以上であった。

「文章表現法」の必要性

(1) はじめに

帝京短期大学の教育目的の一つは、社会に役立つ各種の資格を身に付けた人材の養成である。そのため、本学のどの学科やコースでも学外実習が実施されており、実習後の実習評価表には、様々なコメントが記入される。例えば、こども教育学科で教育実習をお願いした幼稚園から、学生の社会人としての自覚に関して、ここ数年の間に表1のような否定的なコメントが記入されて返送されている。無断欠勤や実習日誌の提出がないなどの極端な事例もあるが、学生の挨拶、言葉遣いや国語力、社会的スキルなどについて、厳しい指摘がなされている。

学生の国語力や社会的スキルの低下を補うことを目的に、1年次学生を対象とした「文章表現法」や、2年生を対象とした「社会人入門セミナー」が複数の学

科コースで開講されている。「文章表現法」の講義では、

表1: 幼稚園教育実習評価表に見られる学生の社会的スキル等に関するコメント

挨拶・言葉遣い	態度・振る舞い・身だしなみ
挨拶ができない 言葉遣いを丁寧に 言葉遣いが親しい者同士のようになる 言葉遣いの乱れがこどもに影響している	連絡もなく打ち合わせに来なかった 無断欠勤 立ち居振る舞いが学生そのもの ひとに何かを教えてもらう態度ではない 疲れた顔や態度が露骨に見られた
国語力	壁に寄り掛かることが目につく 座り込んでしまうことが目につく 横座りしている
実習日誌を丁寧に記入してほしい 実習日誌の誤字、脱字、当て字が多い 指導しても乱雑さや字の乱れが直らない 実習日誌に反省点を活かしていない 提出物として評価できるような内容ではない	実習生同士の私語が目立つ 実習生同士の私語で次の行動が遅れた 指導の意図を汲み取ろうとする意欲がない 指導内容を汲み取ることができない 注意されたことが次の時に活かされない 何度も指導したが身だしなみの改善がない 規律ある態度が欲しい
提出期限	
実習日誌の提出がない 提出期限を守らない 提出期限を度々遅れた 実習日誌の書き忘れ	

建学の精神を生かすための挨拶や礼儀、葉書や手紙の書き方などの人間関係スキル、漢字の読みや書き取り、敬語などの国語力、自己の性格や大学での学習内容の自己分析、アルバイトなどの社会体験の内容のまとめや自己分析、履歴書やエントリーシートの記入方法、適性検査SPI(Synthetic Personality Inventory)の取り組み方等、学生の国語力や社会的スキルの強化と就職

活動に必要な基礎知識を身に付けることを目的とした内容となっている。

(2) 学生の就職問題と社会的スキル

1980年代末頃までは、企業や会社のほとんどは終身雇用制度により、一旦就職した社員は停年まで勤務するのが普通であった。このため企業や会社は、リスクを避ける目的もあって、信頼する大学の講座や研究室を中心に求人依頼をした。指導教員は、学生の就職について直接責任を負っていたため、その責任を全うするために、講座や研究室、学科等の先輩が、後輩の学生の指導を行うなどの形で、社会的スキルの指導を行っていた。しかし、特定の講座や研究室、大学等に求人が集中し、学歴社会を助長し、就職機会の平等性が損なわれているとの批判が大きかった。

また、1980年の大学進学率は26.1%、短期大学進学率は11.3%で(表2)、大学や短期大学に進学する学生の家庭は、ある程度経済的に余裕のある家庭の子女が多かったと思われ、家庭の教育力も大きく、家庭での社会的スキルの指導機会も充分にあったと考えられる。

表2. 大学・短期大学への進学率¹⁾・入学定員未充足率²⁾・入学定員充足率³⁾・合計特殊出生率⁴⁾の経年推移

年度	1980	1985	1990	1995	2000	2005	2010	2012
	昭55	昭60	平2	平7	平12	平17	平22	平24
短期大学								
短大進学率(%)	11.3	11.1	11.7	13.1	9.4	7.3	5.9	5.4
入学定員未充足私立短大校数の割合(%)	-	-	-	11.8	58.0	41.5	62.5	69.7
私立短大入学定員充足率(%)	-	-	-	-	-	99.5	90.9	88.0
大学								
大学進学率(%)	26.1	26.5	24.8	32.1	39.7	44.2	50.9	50.8
入学定員未充足私立大校数の割合(%)	-	-	4.1	4.4	27.6	29.5	38.3	45.8
私立大入学定員充足率	-	-	-	-	-	109.9	108.5	104.2
合計特殊出生率	1.75	1.76	1.54	1.42	1.36	1.26	1.39	-

注1) 昭:昭和、平:平成
 注2) 合計特殊出生率:15歳から49歳までの女性の年齢別出生率を合計したもので、1人の女性がその年次の年齢別出生率で一生の間に生むとした時の子どもの数に相当する。

1986年4月より男女雇用機会均等法(雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保等女子労働者の福祉の増進に関する法律)が施行され、男女の就職機会の法的な平等性が担保されることになった。さらに、1987年に入ると、日本は実態のないバブル経済に踊り、企業や会社の求人も増加した。

1990年にはバブル経済が崩壊して日本は長期の経済不況の時代へ突入し、社会構造の変革を迫られて正規雇用の求人も減少し(就職氷河期)、若年者の派遣労働やフリーター、ニートが増加して大きな社会問題となった。企業も入社後に長期に亘って新入社員教育を実施する余裕もなくなり、必要最低限の内容を1ヶ月前後で実施するようになった。雇用機会の減少に伴い、1990年代から大学進学率が増加し、2009年には50.2%となり、以後横ばい状態が続いている(表2)。すなわち、家庭の経済状況から、これまでは大学に進学する余裕のなかった家庭層の子女も大学に進学する

ようになったと考えられる(文献5のp.53、今より経済的ゆとりがあれば一年収が低いほど「就職よりも進学」させたい、p.62、将来の職業や収入を決める要因(保護者)-子世代より「経済力」重視)。

また、1990年には、1989年の合計特殊出生率が1966年の丙午の数値の1.58を割り、1.57ショックと呼ばれ、以後2005年まで減少の一途をたどり、2006年以降は若干の回復が見られ1.3代で推移しているが、いずれにしても少子化傾向にある。このため、私立の短期大学や大学での入学定員未充足校が増加している(表2)。特に私立短期大学では、2005年以降の入学定員充足率の急速な落ち込みが目立つ(表2)。大学入学定員の増加と少子化傾向による18歳人口の減少は、大学進学への門戸を広げる結果になり、経済的余裕のなかった家庭の子女も大学に進学し、高等教育の機会の増加を促した。(文献5のp.70、進路希望は実現したか-8割前後が高3秋の希望通りの進路へ)。しかし一方、必然的に家庭の教育力による社会的スキルを充分身に付けられない進学者が増加したとも考えられる

(3) 学生の採用方法の変更の影響

1997年以降は、大学側の就職問題懇談会が「大学、短期大学及び高等専門学校卒業・修了予定者に係る就職について(申合せ)」を、日本経済団体連合会の企業側が「採用選考に関する企業の倫理憲章」をそれぞれ定め、相互に尊重して行うという方式が採られるようになった⁶⁾。現在のような会社説明会やエントリーシートの提出、集団面接や役員面接などの就職活動スタイルが導入され、就職については学生の責任によって実施されるような制度に変更された。

1999年には、製造業を除いて派遣労働が原則自由化され、更に2004年には、製造業への派遣労働が解禁された。2003年には規制緩和政策の一環として構造改革特別区制度が導入され、企業が人材確保のための大学経営を行うなどの現象も見られるようになった。

以上のような社会情勢のため、社会的スキルを充分身に付けていない入学者の増加と、企業による学生の採用方法の変更の影響で、大学や短期大学が学生の社会的スキルの指導を行わざるを得ない状況が招来したのである。例えば、高校を卒業して進学後、授業についていけないと回答した学生は、大学で26.6%、短期大学で21.4%にのぼる(文献5のp.107)。多数の大学で、学生のリメディアル教育や学び直しの場を設け、

学生支援事業を立ち上げるなどの様々な試みによって、種々の分野の大学生の学力不足や社会的スキルの向上を図る努力がされている⁷⁸⁾。

(4) 社会的スキルとしての敬語

バブル経済崩壊後の不況の影響から、会社や企業は、規模の拡大による更なる経営の効率化を図るようになった。規模の拡大によるサービスの差異を防ぐ目的で、社員や学生アルバイトの言葉遣いについても、「～になっております」、「～でよろしかったですか」などの言葉遣いに代表される、いわゆるマニュアル”敬語”(バイト語・ファミレス言葉・コンビニ言葉)を使わせるようになったと考えられる。

一方、若年者が、自分の主張を和らげて伝える目的で、半質問形(無意味に語尾を上げて問いかけるような話し方)、とか弁(午後とかは)、テキ弁(私的には)、不要な言葉をはさむ(ていうか、逆に)、相手に無理やり同意を求める(私って～じゃないですかあ)などの言葉遣いがマスコミなどを通じて広まり、社会的な話題になった。

2005年3月30日文科科学大臣は、社会生活を送る上で「コミュニケーションを円滑化し、人間関係を構築」するのに敬語が重要だが、多くの人が敬語の必要性を感じつつ、必ずしも適切に運用されているとはいえないとの諮問理由を付し、文化審議会に「敬語に関する具体的な指針の作成について」諮問した。

この諮問に対し、小説家の阿刀田高氏を委員長とする文化審議会の敬語小委員会は、2007年2月2日に「敬語の指針」を文科科学大臣に答申した⁹⁾。答申は、「敬語は、人と人との相互尊重の気持ちを基盤とすべきもので」その役割は、「人が言葉を用いて自らの意思や感情を人に伝える際に、単にその内容を表現するのではなく、相手や周囲の人と、自らとの人間関係・社会関係についての気持ちの在り方を表現する」ことである。ここで「気持ちの在り方とは、例えば、立場や役割の違い、年齢や経験の違いなどに基づく「敬い」や「へりくだり」などの気持ち」で、「敬語は、言葉を用いるその場の状況についての人の気持ちを表現する言語表現としても、重要な役割を担っている」。2004(平成16)年に「文化庁が実施した「国語に関する世論調査」において、「今後とも敬語は必要である」という意見が回答者全体の96.1%によって支持されている。国民一般の間で、敬語の重要性が将来に向けても強く認識されている」としている。また、「「マニユ

アル敬語」への批判とは、マニュアルの中での敬語の示し方、更にもそのマニュアルに過度なまでに従った敬語使用への批判である」と述べている。

さらに「敬語についての教育」の項では、「敬語を活用できるようになる過程では、学校教育や社会教育での学習と指導が重要な役割を果たす。すなわち、日常生活で周囲の人が実際に敬語を用いるところを見聞きし、それに学んで実際に使ってみるという経験を大切にしながらも、能動的・意図的な学習や教育の機会を積極的に設けることが不可欠である」と述べている。そして「敬語の仕組み」の項では、敬語のこれまでの分類である尊敬語、謙譲語、丁寧語の3分類を、これまでの謙譲語を謙譲語1、謙譲語2(丁寧語)の2分類に、丁寧語を丁寧語と美化語の2分類に分け、全体を尊敬語、謙譲語1、謙譲語2(丁寧語)、丁寧語と美化語の5分類とした。また、二重敬語についても、慣用的に二重敬語が使われている言葉遣いを認めている(お召し上がりになる、お伺いする、など)。

(5) 学生の敬語に対する意識調査

上記のような社会情勢を踏まえ、今後の講義内容の検討や授業改善に資するために、学生がいつから敬語の使い方を学習するようになったのか、あるいはどのように正しい敬語の使い方を学習したと考えているのかなどに関する簡単な質問紙調査を実施した。

調査は、2012年10月22日の「文章表現法」の講義に出席した帝京短期大学生生活科学科の女子学生52人全員に対して実施した。回答率は100%である。学生の年齢分布は、56歳が1人、21歳が1人、20歳が4人、19歳が27人、18歳が19人であった。学生に対する質問紙調査の調査項目は本文末に再録してある。

結果と考察

(1) 学生の敬語使用と敬語学習の意識

敬語を正しく使うことができると考えているかを質問したところ、ひと並みには正しく使えると思うが26人(52.0%)、正しく使えないと思うが21人(40.4%)、よく分からないが5人(5.6%)で、学生の52%はひと並みには正しく使えると考え、約40%が使えないと思うと考えている。

正しい敬語の使い方の学習の有無を尋ねた結果、学校で学習した31人(59.6%)、親から学んだ12人(23.1%)、アルバイト先で学んだ13人(25.0%)、学習

したことがない6人(11.5)、その他1人(1.9%)であった。約6割の学生が学校教育の一環として敬語を学習したと認識している。

(2) 学生の敬語の使い方に関する意識

前問でひと並みに敬語を正しく使えると思うと回答した26人の学生は、学校で学習したが11人(42.3%)、親から学習したが10人(38.5%)、アルバイト先で学んだが6人(23.1%)であった(複数回答者1人)。前問で敬語を正しく使えないと思うと回答した21人の学生では(複数回答者がいるため回答数25人)、学校で学習した17人(68.0%)、親から学習した2人(8.0%)、アルバイト先で学んだ6人(24.0%)であった。すなわち、敬語を正しく使えないと思うと回答した21人の学生では、敬語の使い方を親から学習した学生が極端に少なく、家庭の教育力がないため、両親から敬語の使い方を学習する機会がない学生が多いという顕著な傾向が見られる。

また、正しい敬語の使い方の学習の有無の間に、学校、親、アルバイト先で学習したと回答した学生26人に、敬語を学習した時期について尋ねたところ、幼稚園・保育園の年齢で2人、小学校低学年(1~2年)の年齢で1人、小学校中学年(3~4年)の年齢で3人、小学校高学年(5~6年)の年齢で10人、中学校の年齢で23人、高等学校の年齢で25人、その他の年齢で1人であった(複数回答者がいるため回答数65人)。ほとんどの学生(48人、73.8%)は、中学校、高等学校の時に敬語の使い方を学習したと回答している。

(3) 学生の敬語使用の頻度と使用理由

普段の生活で敬語を使っているか尋ねると、いつも使っている7人(13.5%)、時々使っている20人(38.5%)、たまに使っている23人(44.2%)、使っていない2人(3.8%)と、何らかの機会に敬語を使うとの回答が96.1%であった。普段の生活で敬語をいつも、時々、たまに使っている学生50人に、敬語を使っている主な理由を尋ねると(複数回答のため回答数73人)、親から敬語を使うようにいわれているから4人(5.5%)、友人などの身近な人たちが使っているから3人(4.1%)、学校の先生が使っているから7人(9.6%)、敬語を使わなければならない機会を経験しているから29人(39.7%)、敬語を使うのがマナーだから27人(37.0%)、その他3人(4.1%)であった。学生は、敬語の使用が必要だから敬語を使う(約40%)と、マナー

として敬語を使う(37%)とが敬語を使用する主な理由としている。また、その他と回答した学生3人の注記を見ると、2人は目上または年上のひとには敬語を使わなければならないから、1人はアルバイトと記入しており、いずれも敬語を使用する肯定的な理由をあげている。敬語を使っていないと回答した2人の学生は、敬語を使う機会がないからと、単に使用機会がないからと回答している。

(4) 学生の敬語の学習意欲

最後に「文章表現法」の講義で学習したい敬語の内容について、複数回答で尋ねた。敬語の種類について11人(13.4%)、敬語の一般的な使い方について30人(36.6%)、色々な場面での敬語の使い方について34人(41.5%)、役割演技(ロールプレイング)などによる敬語の使い方の演習2人(2.4%)、クラスメイトとのグループ討議などによる敬語の使い方の演習2人(2.4%)、敬語について特に学習したい内容はない3人(3.7%)であった。色々な場面での敬語の使い方との回答が約42%、一般的な敬語の使い方との回答が約37%、敬語の種類についてとの回答が約13%であった。4割を越す学生が色々な場面での敬語の使い方を学習したいと回答しているが、役割演技やグループ討議などによる敬語の使い方の演習などはしたくないと回答しており、クラスメイトの前では恥ずかしいとの意識と、楽しんで学習したいという当世の学生気質が表れた回答結果となっている。

参考文献・参考資料

1. 文部科学省、平成24年度学校基本調査(速報)、大学、短期大学進学率、2012年8月27日。
2. 文部科学省、私立学校の経営状況について(概要)、平成22年度、平成23年度。
3. 旺文社教育情報センター、私立大・短大入学状況、2006年7月31日、2011年8月12日、2012年9月7日。
4. 厚生労働省、厚生統計要覧(平成23年度)、第1-20表 合計特殊出生率、2012年5月8日。
5. 東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センター、高校生の進路追跡調査-第1次報告書、p.1~166、2007年9月1日。
6. 田中宣秀、理想像からほど遠いわが国の就職採用活動-就職協定が廃止されてから10年が経過して-、生涯学習・キャリア教育研究、第2号、p.11

～18、名古屋大学教育学部、2006年3月。

7. 読売新聞、自主的な学び直しの場合、大学の實力・欄、2012年10月12日(金)。
8. 読売新聞、学び直しの場合が育てる意欲、大学の實力・欄、2012年10月19日(金)。
9. 文部科学省文化庁文化審議会、敬語の指針、p.1～177、2007年2月2日。

質問紙調査項目

4. あなたは、自分は敬語を正しく使うことができると考えていますか。

- (1) 正しく使えると思う
- (2) ひと並みには正しく使えると思う
- (3) 正しく使えないと思う
- (4) よく分からない
- (5) その他[]

5. あなたは、正しい敬語の使い方を学習したことがありますか。

- (1) 学校で学習した
- (2) 家庭で親から学んだ
- (3) アルバイト先で学んだ
- (4) 学習したことがない
- (5) その他[]

5-1. 問5で正しい敬語の使い方を学習したことがある(1)～(3)と回答した方にうかがいます。あなたが正しい敬語の使い方を学習したのは主にいつ頃ですか。

- (1) 幼稚園・保育園の年齢で
- (2) 小学校低学年(1～2年)の年齢で
- (3) 小学校中学年(3～4年)の年齢で
- (4) 小学校高学年(5～6年)の年齢で
- (5) 中学校の年齢で
- (6) 高等学校の年齢で
- (7) その他上記以外の年齢で[]

6. あなたは、普段の生活で敬語を使っていますか。

- (1) いつも使っている
- (2) 時々使っている
- (3) たまに使っている
- (4) 使っていない
- (5) その他[]

6-1. 問6で敬語を使っている(1)～(3)と回答した方にうかがいます。あなたが普段の生活で敬語を使っている主な理由は何ですか(複数選択可)。

- (1) 親から敬語を使うようにいわれているから

- (2) 友人などの身近な人たちが使っているから
- (3) 学校の先生が使っているから
- (4) 敬語を使わなければならない機会を経験しているから
- (5) 敬語を使うのがマナーだから
- (6) その他[]

6-2. 問6で敬語を使っていない(4)と回答した方にうかがいます。あなたが普段の生活で敬語を使っていない主な理由は何ですか(複数選択可)。

- (1) 親から敬語を使うようにいわれたことがないから
- (2) 友人などの身近な人たちが使っていないから
- (3) 学校の先生が使っていないから
- (4) 敬語を使わなければならない機会を経験したことがないから
- (5) 敬語を使うのが面倒だから
- (6) その他[]

7. あなたが敬語についてこの講義で学習したい内容に関し、自分の考えに最も近いものを一つ以上選んで回答して下さい(複数選択可)。

- (1) 敬語の種類について
- (2) 敬語の一般的な使い方について
- (3) 色々な場面での敬語の使い方について
- (4) 役割演技(ロールプレイング)などによる敬語の使い方の演習
- (5) クラスメイトとのグループ討議などによる敬語の使い方の演習
- (6) 敬語について特に学習したい内容はない
- (7) その他[]

(2012年12月3日受理)